

# 佛蘭西書巡覧 22

平山 弓月

詩的レシという新しい様式を最初に具体化した小説として挙げるべきは、おそらくアラン＝フルニエの『グラン・モーヌ』だろう。第一次世界大戦の戦場で作者が夭折する一年前、一九一三年に刊行された『グラン・モーヌ』は、まちがいに独り独自の暗示力をはらんでいる。

ドミニク・ラバテ『二十世紀フランス小説』

以前の稿でお約束しましたように、今回はアラン＝フルニエ **Alain-Fournier** (1886-1914) が遺した『ル・グラン・モーヌ (さすらいの青春)』 **Le Grand Meaulnes** (1913) を紹介しましょう。

パリの南方、フランスのほぼ中心部である、ソローニュ地方の風物を背景に展開されるこのレシの作者は、本名アンリ・アルバン・フルニエといい、物語の主人公フランソワ・スーレルと同様、この地方の小学校教師の息子として生まれました。作者はこの父のもとで教育を受け、その後パリの高等中学校で優秀な成績を修めるものの、将来の道に迷い、海軍の兵学校を目指したり、高等師範学校への入学を試みたりしましたが、結局は果たすことができず、二十二歳で兵役に就き、同時にこの時期から盛んに散文や散文詩を書き始めました。そして二十四歳で兵役を終え、ジャーナリズムの世界に入りました。そこで文芸通信欄の編集を担当し、ますます文芸の深みにはまりこんでいったのです。後に世の文学青年たちの必読書となる『往復書簡』をかわし、また義弟となるジャック・リヴィエールとの交遊もパリ時代に始まりました。

1914年、欧州大戦勃発とともに召集を受け、そのまま帰らぬ人となってしまいました。しかし彼の短い生涯は、彼が遺した唯一といってもよいこのレシで、不滅のものとなったのです。

物語には、作者の幼少期から青年に達するまでの、さまざまな想いが語られています。書名となるル・グラン・モーヌ (モーヌの大將) こと、オーギュスタン・モーヌがフランソワの前に現れたのは、

Il arriva chez nous un dimanche de novembre 189... (かれが、ぼくたちの所へ来たのは、189...年の十一月のある日曜日だった。)

モーヌはフランソワよりも少し年長で、変化の少ない田舎町の学校生活を送るフランソワの親友となります。大柄で少しばかり「大人びた」モーヌは周りからも、敬愛を集めることとなります。

モーヌは偶然のことながら、幻想的な冒険の世界に足を踏み入れることとなります。レシはこれに

よって展開する、新たな出来事を中心にして、「少年」から「青年」へと変わってゆく、不安定で、恐れおののきに満ちた時代を描き出しているのです。

モーヌは迷い込んだ、古屋敷で「ふしぎなお祭り」に遭遇し、そこで一人の女性と出会います。

« Vous êtes belle », dit-il simplement. ....

« Je ne sais même pas qui vous êtes », dit-elle enfin.

(「あなたは、美しいかただ」とそれだけを言った。…「わたし、あなたがどなたなのかも知っていませんのよ」とついに彼女は言った。)

のちにモーヌの妻となり、女の子を遺して死ぬイヴォンヌ・ド・ガレとモーヌとの邂逅でした。学校に戻ってきたモーヌは、しかし古屋敷がどこにあるのか、どの道を行けば再びたどり着けるのか、そこへの「失われた道をもとめて」 **A la recherche du sentier perdu**、さらにはイヴォンヌとの再会を求めて苦しむのです。

このレシには、まだ二人重要な人物が登場します。イヴォンヌの弟フランツ・ド・ガレと、彼とは結ばれることなく失そうする婚約者ヴァランティーヌ、これらの登場人物が、さまざまに交錯し、モーヌの「さすらい」の旅を彩ります。しかしモーヌの旅は、終わることがないのです。

Et déjà je l'imaginais, la nuit, enveloppant sa fille dans un manteau, et partant avec elle pour de nouvelles aventures.

(そしてはや、ぼくの目には、今夜、かれがこのむすめをオーバーにくるみ、いっしょに新しい冒険の旅へと出発して行く姿がうかんでいたのだった。)

このモーヌがたどった「さすらい」を、「少年」から「青年」「大人」へとたどる旅を、読書という手段でたどってみてください。

(本稿を綴るにあたり、田辺保先生の訳書のお世話になりました。)

ひらやま ゆづき(教授・フランス語・フランス文化論)

